

研究ノート

『万葉集』略音仮名・二合仮名における音韻文法の影響

西 村 康 平*

1. はじめに

本稿では、『万葉集』にて万葉仮名として用いられる漢字音のうち、特に略音仮名および二合仮名の現れを調査し、当時の日本語話者の音韻文法の影響を見出すことを試みる。尾山による研究（2007, 2019）を下敷きとして、漢字の選択や字音の現れについての強い偏りが存在し、少なくともその一部には、当時の日本語の音韻文法の影響が見られることを示す。

略音仮名と二合仮名の両者ともに、閉音節（CVC 構造）を持ちうる当時の中国語のための文字である漢字を、CV 構造のみが可能な開音節言語であったと考えられる当時の日本語の音韻構造に合致させるための用法である。例えば、第 13 巻 3309 番歌に見られる「作楽花（さくらばな）」という語においてはその両方が用いられている。「作」も「楽」も漢字音としては CVC 構造を持っていたと考えられるが、第 1 字「作（さく）」では二合仮名として、元の CVC 構造に母音を補い、CVCV 構造としている。続く第 2 字「楽（ら）」では略音仮名として、元の CVC 構造の最後の子音を略し（あるいは無視し）、CV 構造の発音を表している。

これらの用法における音韻構造の変化は、共時的な音韻現象に比較して考えることができる。すなわち、略音仮名においてどの子音が略されうるのか、二合仮名においてどの母音が補われるのかは、音韻的な操作に類似しており、そ

* 青山学院大学国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科

れぞれ子音削除と母音挿入と比較しやすい。実際、本稿で見ていく通り、漢字の選択および字音の出現の偏りには、音韻文法の影響と考えられる特徴を多く見出すことができる。

一方で、本研究には音韻研究として困難な点も多くある。第一に注意が必要なこととして、本稿で議論される略音仮名、二合仮名の問題は「漢字をどの様に発音するか」というものではなく、すでにある語の発音に対して「どの漢字を用いるか」あるいは「どの漢字ならば許容されるか」という点であることが挙げられる。そうした漢字の選択には、音韻文法以外の影響も少なくないと考えられるため、略音仮名および二合仮名の出現傾向をもって、直接的には音韻文法の現れとは言えないことには注意が必要である。『万葉集』の成立には時代的な幅があり、知識や記述に対するスタンス、嗜好の違いなども記述者の間にあったであろうと考ええると、この記述作業の結果が当時の日本語母語話者の音韻文法を直接的に反映しているとは言い難い。また当時の中国語が持っていた特徴も影響している可能性もある。これらの要因が、実際にどの程度関係しているかを検証することは非常に難しい。

しかしながら、『万葉集』における仮名表記の主たる目的は、歌すなわち発音の記録であり、音韻文法が関係していないこともあり得ないだろう。本稿では、それはどの部分でどの程度言えるのかを可能な範囲で検討したい。本稿の以下の内容には、いまだ分析や検討が不十分な部分も少なくないが、今後の研究の可能性の模索や資料公開の意義も含めて、研究ノートとしてまとめるものである。

2. 出現データと音韻的特徴、偏り

2.1 略音仮名

2.1.1 出現の概要

前述の通り、略音仮名は漢字原音が持っていた閉音節構造の尾子音（韻尾）を略し、一つの開音節の記述に用いるものである。読者が仮に漢字原音の知識を持っていたとしても、尾子音を無視して読むことが要求されることになる。

仮に漢字原音の構造を入力、略音仮名としての発音を出力として音韻現象に比較すると、/CVC/ → [CV] という形で尾子音の削除に類似しているとも言える。

以下に、略される尾子音 /p, t, k, m, n, ŋ/ ごとの例を挙げる：

(1) 略音仮名の例¹⁾

/p/	甲：kap → ka	甲斐乃国	かひのくに	巻 3-319
/t/	吉：kit → ki ₁	等吉麻都等	ときまつと	巻 15-3679
/k/	得：tok → to ₂	比得波伊倍騰	ひとはいへど	巻 5-853
/m/	南：nam → na	甘南備乃里	かむなびのさと	巻 7-1125
/n/	安：an → a	安我已許呂	あがこころ	巻 14-3526
/ŋ/	等：tonj → to ₂	許等和理	ことわり	巻 5-800

こうしたタイプの仮名は『万葉集』集中に 93 字種、69 音節種、のべ約 7700 回の出現する（尾山 2007, 2019）。歌本文全体²⁾ から見て約 6% を占め、後述の二合仮名と比較してかなり多い。現代において見られるものも「能登、安倍、浪漫」など固有名詞を中心に、多くを挙げることができる。

2.1.2 音韻構造における特徴、偏り

本節以降の議論において、漢字音に含まれる分節音について、仮に CVC 構造を持っていると仮定した場合の頭子音、母音、尾子音をそれぞれ C1、V1、C2 とする。C1 は持たないことも可能であり、C2 は略音仮名では略され、発音には反映されないことになる。また、二合仮名において、C2 の後に補われる母音を V2 とする。

表(2)は『万葉集』に表れる略音仮名について、V1 と略される尾子音 C2 の関係をまとめたものである。字種数、のべ出現回数の数値は尾山（2007）のものをそのまま採用してある。太字は 10 回以上の出現、括弧入りは 1 回だけの出現を意味する：

1) 母音の添数 1、2 はそれぞれ甲類、乙類を示す。

2) 尾山に倣い、本研究の万葉仮名の調査は原則的に『万葉集』の歌本文のみに限る。

(2) 略音仮名 C2 \ V1

C2 \ V1	i	i1	i2	e	e1	e2	a	o	o1	o2	u	字種数	のべ回数
p							(甲)					1	1
m							南					1	3
t	(日)	吉必		列(烈)	別(結)		末伐(八)	物越勿				13	457
n	仁印新尽 陳民(隣 准)	(嬪)		天年延田 (連)	辺弁便面 返反		安散万満 難伴半	聞文袁遠 怨煩			君(雲)	35	1623
k	(式)						泊楽作薄 (積)	目木(憶)	欲則(俗)	得(特賊)		15	257
ŋ					平		香楊良浪 寧芳(方 房防)	朋望(蒙方)	用宗(容)	曾登等騰 能凝僧藤 (興)	濃農	28	5333
計	10	3	0	7	9	0	26	16	6	12	4	93	7674
計：5母音	13			16			26	34			4		

太：10回以上、(X)：1回のみ

単純に仮名としての機能の問題だけを考えた場合、略音仮名において発音の情報を担うのは、略されずに残る CV の部分のみであり、略される尾子音が何であるかは重要ではないはずである。しかしながら尾山でも指摘、分析されている通り、略音仮名に用いられる漢字音の構造には大きな偏りがあり、尾子音が何であるかがその選択において重要なのは明らかである。こうした偏りには、単純な表記の問題だけではない、当時の日本語の音韻文法が影響している可能性がある。

最も顕著なのは、尾山の研究でも注目されている通り、両唇音 /p, m/ の尾子音を持つ漢字は、略音仮名としてはほとんど表れないことである。尾山自身はこの 2 音をまとめ、両唇音の持つ視覚的、調音的な明瞭性が要因となって、略しにくくなっているとの分析を行っている。通言語的な音韻特徴の一つである、「有標な要素ほど削除されにくい」(de Lacy 2006 など) という傾向を考慮すると、より有標な子音である軟口蓋音 /k, ŋ/ を尾子音として持つ漢字が、略音仮名に多く採用されている事実は奇妙である。純粋な音韻文法だけでなく、別の要因も関係して、こうした偏りが生じたと考えるべきではないだろうか。また、尾山の提案する /p, m/ の持つ視覚的、調音的な明瞭性とは、日本語母語話者としての音韻文法というよりも、当時の中国語を第二言語として学んだ立場からのものとして理解すべきかもしれない。

他にも部分的な偏りとして目立つのは、V1 が前舌母音 /i, e/ の場合は、尾子音はほぼ歯茎音 /t, n/ であり、軟口蓋音 /k, ŋ/ はほぼ用いられないことである。母音と子音の調音点が近い位置にあることが、子音の省略に有利に働いているとも考えられる。

その他の特徴としては、乙類母音 /i2, e2/ を含む漢字音は、略音仮名には用いられないことが挙げられる。これには何らかの理由が有りそうではあるが、これらの乙類母音の性質をどう考えるかによって、解釈は変わりうる。また、母音が /u/ の場合は尾子音が鼻音 /n, ŋ/ の漢字だけが用いられるが、全体数自体が 4 字種と少ないため、何らかの関係があるのかは不明確である。なお、表 (2) では省いたが、頭子音 C1 と略される子音 C2 との間に何らかの特別な関

係は見出すことはできず、例えば「C1=C2の構造を持つ字音は、略音仮名に選ばれやすい」など、異化現象の影響を受けたような傾向はみられない。

2.2 二合仮名

2.2.1 出現の概要

前述の通り、二合仮名は CVC 構造を持つ漢字音の尾子音の後に母音を補い、連続する二つの開音節の記述に用いるものである。仮に読者が二合仮名としての読みの知識を持っていなかったと考えると、漢字音には含まれていない母音を推測することが要求されることになる。音韻現象に比較するならば、/(C)VC/ → [(C)V.CV] の形式で「母音挿入」および「再音節化」の様な作業が行われていると考えることもできる。以下に母音が補われる尾子音 /p, t, k, m, n, ŋ/ ごとの例を挙げる：

(3) 二合仮名の例

/p/	塔：tap → tapu	絶 <u>塔</u> 浪尔	たゆ <u>た</u> ふなみに	巻 7-1089
/t/	越：wot → woti	越 <u>乞</u> 尔	<u>を</u> ち <u>こ</u> ちに	巻 6-920
/k/	楽：rak → raku	絶 <u>楽</u> 思者	たゆ <u>ら</u> くおもへば	巻 7-1321
/m/	南：nam → namu	和加礼 <u>南</u>	わかれ <u>な</u> む	巻 5-891
/n/	君：kun → kuni	嶋 <u>檣</u> 名君	しま <u>な</u> らなくに	巻 12-3166
/ŋ/	鍾：sinj → sinju	<u>鍾</u> 礼乃雨丹	<u>し</u> ぐ <u>れ</u> のあめに	巻 12-3213

こちらのタイプの仮名は、集中に 68 字種、55 音節種、のべ 306 回の出現 (cf. 尾山 2007, 2019) があり、略音仮名に比べかなり少ない。割合としては『万葉集』歌本文全体の、わずか 0.24% を占めるのみであり、漢字音を用いる万葉仮名の中でも例外的な用法とも言える。

略音仮名と同じく、二合仮名も現代においても用いられているが、そのほとんどは地名などの固有名詞に残るものである。現代でも広く用いられている代表例として「難波、相模、信濃」を挙げることができるが、後で議論する様に、これらの中でも特に「信濃」はかなり特殊である。

2.2.2 音韻構造における特徴、偏り

下記の表(4)は二合仮名において、漢字音の尾子音 C2 とその後に補われる V2 の関係をまとめたものである。表(2)と同様に太字は 10 回以上、括弧入りは 1 回だけの出現を示すのに加え、赤字は V1=V2 であることを表す。マス内の数値はのべ出現回数の合計であり、出現の多寡を色の濃度に反映してある：

(4) 二合仮名 C2 \ V2

C2 \ V2	i	e	a	o	u	計 (字種、のべ)
p	(雑) 1				(颯匠塔胝) 4	5, 5
m	南(瞻) 4				兼南濫甘監 險三点覧(敢 金今念藍廉) 107	17, 111
t	越乞(巷) 14			越 2	爵薩 6	6, 22
n	難君万散遍 (干漢丹彈粉 丸) 56	(雲) 1	信 6		敏(讚珍) 6	16, 69
k	式色(拭) 6		(積) 1	極(徳) 3	筑各叔幕莫 楽落福(憶作 目) 56	17, 66
ŋ	当 6		相 3	凝(香極) 5	鍾香 19	7, 33
計 (字種、のべ)	21, 87	1, 1	3, 10	6, 10	37, 198	68, 306

太：10回以上、(X)：出現1回、赤：V1=V2

この集計において分かる最も重要な点は、V2 として補われる母音の偏りである。すなわち、狭母音 /i, u/ が補われるケースが圧倒的に多く、字種数では 85.3%、のべ出現数では 93.1% を占める。共鳴性が低く目立たない /i, u/ が補われるという事実は、通言語的な音韻文法の観点からも自然に理解できる。また、C2/t, n/ の後には /i/, /m, k, ŋ/ の後には /u/ が多く補われ、それぞれの音の調音位置が、補われる母音の選択に大きく関わっていることを強く示唆している。特に略音仮名とあわせて、歯茎音 /t, n/ と前母音 /i, e/ の結びつきの

強さは非常に興味深い。

狭母音以外が補われた二合仮名は10字種、のべ21回の出現を数えるが、そのうちの7字種、のべ13回の出現ではV1とV2が同一である。こうした特殊な仮名遣いが許容された背景には、当時の日本語は母音調和を好む傾向があったとも推測できるが、出現数がそれほど多くないため、断定はしにくい。

同一の漢字に異なる母音が補われて用いられているものは少なく、「南 / namu, nami/」、「香 / kaŋo, kaŋu/」、「越 / woti, woto/」のわずかに3字のみであり、最後の例については、母音調和の影響によるものと考えることができる。こうしたことから、漢字ごとに補われる母音はほぼ決まっていた、もしくは予測可能であったと考えられる。この特徴は現代の日本語における漢語CVCV型の特徴(Tateishi 1990)とも類似している。

前述の通り『万葉集』の成立において実際に行われた作業は、すでに存在する語の発音に対して、それを記述する際に可能な漢字を選択することである。そのため、二合仮名のこれらの特徴や傾向をもって即、当時の日本語にいて狭母音挿入や母音調和が起こっていたことの証拠とみなすことはできない。しかしながら、顕在的か潜在的かは不明だが、当時の音韻文法にそれらを好む傾向があり、それが反映されていることも十分考えられることであり、それ以外にこれらの偏りについての妥当な説明は難しいのではないだろうか。特に二合仮名において補われる母音は、元の漢字音には全く存在しない部分であるため、当時の日本語の音韻特徴が最も表れやすい部分であると言える。

なお、上記の「補われる母音は狭母音 /i, u/ もしくはV1と同一」という強い傾向から外れる二合仮名は、「信 /sina/」、「雲 /une/」、「香 /kaŋo/」の3字種のみである。後二者は1回だけの出現であり、臨時的な使用もしくは記述ミスの可能性があるが、「信 /sina/」だけは複数回(6回)現れ、そのすべては「信濃」という地名で用いられている。特殊な仮名である二合仮名のうちのさらに特殊な例が、現代でも残っている事実は、歴史の偶然とはいえ興味深い。

母音の特徴として、V2以外に興味深いのは、V1が広母音 /a/ である漢字音が比較的多いことである。34字種、のべ152回の出現があり、これは二合

仮名全体の約半数（それぞれ、50%、49.7%）に相当する。略音仮名でも同じ構造の漢字音は多いが、それでも字種数にして全体の4分の1をやや上回る程度（28.4%）である³⁾。この偏りの一因として考えられるのは、二合仮名の場合において、V1に共鳴性の高い母音があった方が、その次の音節にて補われた母音が相対的に目立たなくなることである。補われる母音の大部分は狭母音であるが、それらの共鳴性が低く目立たない音であることがその理由であるならば、V1の母音が共鳴性の高い/a/であることにより、二合仮名全体の安定性や許容度は増すと言える。

略音仮名との比較において興味深い点として、両唇音 /p, m/ の振る舞いを上げことができる。尾子音 /p/ を持つ漢字音は略音仮名と同じく、二合仮名にもほとんど採用されず、5字種がそれぞれ一度ずつ現れるのみである。この事実は /p/ という子音が、当時の段階から日本語音韻の中で不安定であり、この音を持つ漢字音は仮名の種類に関係なく、日本語の発音記述には適していなかったと判断されたのではないだろうか。

その一方で、尾子音 /m/ の振る舞いは略音仮名と二合仮名で大きく異なる。前述の通り、略音仮名には、この音を持つ漢字音も非常に少ないが、二合仮名としてはこの尾子音をもつ漢字音が最も多く出現し、17字種、のべ111回を数える。また、これらの大多数である15字種、109回はV1が/e, a/のどちらかである。また、V1が/e/の場合には、尾子音はほぼ/m/であり、他の尾子音を持つ漢字音はほとんど採用されていない。尾山の指摘の通り、尾子音/m/には、強力な保存の力が働いていたことは明らかである。

2.3 略音仮名、二合仮名の比較

次の表(5)では、略音仮名と二合仮名の音韻構造の分布を、V1とC2の関係において比較した。略音仮名は赤、二合仮名は青、両方で採用されるものは紫で示してある。これまでと同様に太字、括弧入りはそれぞれ10回以上の出現、

3) のべ出現回数については未調査である。

1 回のみの出現を示す。なお、比較を容易にするため、母音の甲類、乙類の違いは捨象してある：

(5) 略音仮名、二合仮名 C2 \ V1

C2 \ V1	i	e	a	o	u
p			(甲 雑 颯 匠塔騰)		
m		兼監險点(瞻念廉)	南濫南甘三覽(敢藍)	(金今)	
t	吉必(日 吉)	列別(結烈)	末伐(八)薩	物勿越乞	鬱
n	仁印新尽陳民(隣准嬪)信敏(珍)	天年延辺弁便面返反田(連)遍	安満伴半難万散(干漢丹彈丸讃)	聞文袁遠怨煩	君雲(粉)
k	式色叔(拭)		泊薄楽作積各幕莫落	目木欲得則(俗特賊)憶極(徳)	筑福(目)
ŋ	鍾	平	楊良浪寧芳(方房防)香当相	用曾登等騰能朋望宗僧藤(蒙方容興)凝(極)	濃農

太：10回以上、(X)：出現1回、赤：略音仮名、青：二合仮名、紫：両方

前述の通り、出現回数は略音仮名が圧倒している一方で、二合仮名の方が幅広い音韻構造を持つ漢字が用いられていることが分かる。言い換えると、略音仮名として採用される漢字の音韻構造の条件はやや厳しいが、二合仮名よりも使いやすく多用されるということである。略音仮名が1音節に対応する一方で、二合仮名は2音節に対応することになる上、漢字音には含まれていない母音を補わなければならないことを考えれば、後者の使用のハードルはかなり高いと言える。また、略音仮名にける尾子音は、仮名としての発音には反映されないため、音韻構造の面では漢字を幅広く選ぶ必要がそもそもない。一方の二合仮名では、尾子音の発音も重要なため、より幅広い漢字音が要求されることになる。二合仮名での記述を、略音仮名で書き替えることは比較的に容易だが、その逆は難しく不可能なことも多い。なお、略音仮名、二合仮名で用いられる漢字は14字種あるが、記述者による使い分けの傾向があり（尾山 2019）、おおむね併用は避けられていたと考えられる。『万葉集』の記述者も、両者の違いは強く意識していたのではないだろうか。

総体的には、略音仮名よりも構造的に複雑な二合仮名の方が、音韻文法の影響や制約を受けやすいと言える。それが足枷となって、もともとの用例は少なく、また時代とともに減少する（尾山 2007, 2019）一因になったとも推測できる。

2.4 おわりに

これまで見てきた様に、『万葉集』に表れる略音仮名および二合仮名には、興味深い音韻構造に関する特徴、偏りが存在する。それらのすべてが当時の日本語話者の音韻文法の現れであると言うことは難しいが、部分的にはそのような影響を見出すことができる。本稿では、要因の分析や先行研究の確認などに不十分な点は多いが、それらについて、今後の研究での進展を図りたい。

参考文献

- 尾山慎 (2007) 「万葉集における略音仮名と二合仮名：韻尾ごとの偏向をめぐって」、『文学史研究 (大阪市立大学国語国文学研究室)』 47 巻、p.22-31.
- 尾山慎 (2019) 『二合仮名の研究』 和泉書院
- de Lacy, P. (2006) *Markedness: Reduction and Preservation in Phonology*. Cambridge University Press.
- Tateishi, K. (1990) “Phonology of Sino-Japanese Morphemes.” *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 13, p. 209-235.

資料

- 国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html#manyo> (2024 年 1 月 15 日確認)
- 小学館 (1994) 『新編 日本古典文学全集 6・9 万葉集』 * 上記コーパスの底本
- 中西進 編 (1985) 『万葉集辞典』 講談社

